

きた うみとしみつ
第55代横綱 北の湖敏満

それまでは、「北の湖、負けろ！」と言われていたのに、今度は「がんばれ！」だなんて。

「ああ、もう俺もダメになってきたんだなあ」と感じましたよ。

力士になるために、私が東京に来たのは13歳。中学1年生の2学期の終わりの時でした。

8人兄弟の7番目です。相撲界に入る時は子供心に、「もう親とは一生会わない」という覚悟で入ったものです。最初は中学を卒業してから入門するという気持ちが強かったけれども、逆に自分のほうから「行く(入門する)なら、早く行く」と言ったもので、すんなり中学1年での入門になったんです。

13歳ですから、もちろん母親は心配だったみたいです。でも、親父は男ですね。

「強くなれなかったら、一生帰ってくるな」

そう言われて、北海道の田舎を後にしたんです。

この入門には、伏線がありましてね。

田舎の知り合いの人が、当時小学生だった私を相撲界に入れたいということで、小学6年生の時の写真、師匠（先代三保ヶ関親方＝元大関・増位山）のところへ持って行ったそうなんです。その前に、他の部屋の親方のところにも写真を持っていったらしいんですが、その部屋では入門を断られた。

それはそうでしょう。その写真に写っていた私は、161センチか2センチの身長で、体重が60キロくらいしかなかったんですから。

でも、師匠は「中学に入ったら、その子に会いに行くから」と言ってくれたそうです。それで、約束どおり、中学1年の初めに師匠が北海道に来てくれた時には、私はもう70キロくらいの体重になっていました。それから、入門するまでの7か月で80キロに増えていたんだから、写真とはまるで別人です。

育ち盛りだったんですかねえ。みなさん誤解されるんですが、相撲界に入るまで、私は相撲の経験ってなかったんですよ。小学生の頃は、柔道が中心。スポーツは全般に好きでして、特に好きだったのが野球です。田舎ではまわしを締めたこと、いっさいありません。

お祭りで相撲大会がある時は、ズボンの上からまわしを締めていましたからね。まわしを締めて本格的に相撲を習ったというのは、純粋にこの世界に入ってからのことなんですよ。

昭和41年の年の暮れ、東京の部屋に来てから新弟子検査までの3週間間に、またドンと太っちゃった。

翌42年初場所前の新弟子検査の時は、173センチで100キロ。普通は相撲部屋に来たら、生活環境が変わったせいでヤせるものだけど、私の場合、まだ13歳ですから。周りの様子もよくわからなくて、たぶん神経を使わなかったんだろうと思いますね。

三保ヶ関部屋近くの両国中学に転校して、ふだんは部屋から学校へ通っていました。東京の本場所の時と地方場所の時は、学校を休んで相撲を取りましたけど、学校があるから本格的な稽古は夏休みとか日曜日しかできないんです。義務教育中ですからね。

それでも、中学を卒業する昭和44年の春場所、私は幕下の38枚目にいたんです。まだ15歳なんですけどね。なんでだろう？ って思いますよ。子供ながらに、やっぱり「勝たなくちゃ」という気持ちだけは持っていたからですかねえ。

師匠の息子さん（二代目増位山＝現三保ヶ関親方）は、同期生なんです。でも、彼は高校3年生での入門だから、年は5つ上。13歳と18歳じゃ、全然違いますからね。その頃は、ライバル心とかそういうのは、ほとんど感じなかったですね。同期に誰がいるとか意識するよりも、師匠に言われるがままに稽古をやっていたというだけ。数年間はそれだけで来ましたからね。

それで中3で幕下だから、なにか特別な思いや教えがあったんじゃないかって、よく言われるんです。でも、私の場合は、「考えない」。これがよかったんじゃないかと、今にすれば思うんです。

とにかく、考えないんです。新弟子として入門した時に、「努力してこの世界の頂上に上がりたい」という気持ちは、誰だってあると思うんです。でも、頂上というのはあまりにも遠すぎる。だから、たとえば三段目になると雪駄が履けるんですが、まずは三段目に上がるうとか、ひとつひとつそういう目標を持って、相撲を取っていった。その次は幕下に上がって、博多帯を締めたい、とかね。それだけです。

相撲部屋での生活を送ることにしても、先輩たちの行動を見て、付いていくことで精一杯ですから、その頃の思い出というものがほとんどない。目の前のことに必死だったんだと思います。

幕下には、結局2年くらいいたんです。

当時は、幕下20枚目以内で全勝したら十両昇進という規定があったんですけど(現在は15枚目以内)、幕下在位中、私は半分くらいそういう位置にいたんですよ。自分でもおかしいなって思うんですけど、幕下の一桁台につけてからが、なかなかチャンスをモノにできない。

昭和45年秋場所は幕下3枚目につけたんです。ところが、この時、足の親指にヒビが入ってしまっていてね。すごく痛かったんだけど、「絶対に勝ちたい」という気持ちでいっぱいでした。でも、この場所は2勝5敗で出直し。新十両に昇進したのは、その半年後のことでした。

17歳11カ月での十両昇進。当時、貴ノ花さん(先代=当時花田=元大関貴ノ花=前二子山親方)の記録(18歳0か月)を破っての最年少関取ということで、それは騒がれましたよ。その後、私の最年少記録は、息子さんの貴花田に抜かれることになるんですが、記録っていうものは、誰かが作ったら、誰かが破るものだと私は思っています。それはもう、繰り返しですからね。これだけじゃなくて、よく私は記録を破られました。でも、「悔しい」という気持ちは一度も持ったことがない。

当人としてみたら、「あ、この人が俺の記録を破るな」というのは、だいたい想像できるものなんですよ。私は17歳で上がったかもしれないけど、「自分は若い」とかそういう気持ちはなかったんです。十両にやっと上がった。上がったからには落ちたくない。そっちの気持ちのほうが強かったからね。

新入幕は昭和47年初場所。18歳7カ月で、また最年少記録です。私はこうして若くして上がって、若くして大人の世界を見たわけなんですけど、親方や後援者の方に食事に誘われて、いろいろな話をしている時でも、やっぱりその話についていけなかったです。

大相撲の世界でいえば、関取は一人前とされています。でも、いくら関取だと言っても、一般社会ではやっぱり未熟ですよ。その後、私は21歳で横綱になりましたけど、それでも一般社会のいろいろな話の時には、まだまだついていけませんでしたから。

その時に思ったことは、社会に出て、この場合、社会に出るということは相撲の世界だけじゃなくていろいろな世界を知っている大人、という意味なんですけど、さまざまな経験を積んでいる人と接触して、自分自身が「ああ、なるほどそういうもんだな」と感じるということが大切なのかな...と。そう感じることを通して、少しずつ大人になっていく実感が湧いたものです。

「大人になる」というのは、そういうことなんじゃないかなあ。人と会って、言葉を交わす。その人の言葉や考えを通じて、自然に大人の考え方が身についていく。いくら横綱だって、人間としては未熟な存在です。現役時代はもちろんのこと、辞めてからのほうが、人に見習うところはたくさんあるわけです。親方になっている今だって、もちろんそうです。人生において、死ぬまでいい意見には素直に耳を傾けること、いいと思ったことは見習うこと、それが大切なことだと私は思っています。「年相応」という言葉がありますが、そういう言葉が今になって理解できるようになってきました。

だからこそ逆に、若い時のほうが燃える面もありますよね。

私は横綱をほぼ10年、63場所務めたんですが、横綱に上がる前っていうのは、もう夢中なんですよ。横綱に上がって、優勝もできて、少し気持ちに余裕が出てきて、引退間際になってくると、「まだ辞められない」という気持ちが出てきて...。そんなふうに、自分が悟った時には、引退ですからね。

思い返してみれば、一番楽しく相撲を取れたのは、幕内上位から三役に上がった頃だったような気がします。ただね、私は関脇には2場所しかいないんです。そして、大関3場所で横綱になった。あの1年って、なんだったんだろうな。

初めて関脇に昇進した昭和48年九州場所、10勝してはいるんですが、その時に足をケガしてしまったんです。それで次の場所に向けての稽古が、ほとんどできなかつたんです。あまりにも痛くて。

それでどうしたかという、これまでの相撲とは一転、自分から突っ張りにいったり、とにかく早く差してスピーディーな相撲を取ろうと心がけました。そういう相撲に変わってから、左から当たっていくという、私の相撲の型ができました。言ってみれば、ケガの功名です。

速い相撲が功を奏して、翌49年初場所は、関脇で初優勝。それで大関に上がるわけなんです、大関に昇進してからは、必ず二桁は勝たなきゃという気持ちが強くて、そっちのほうがかえってつらかったですね。逆を言えば、そういう気持ちがあったからこそ、大関在位3場所で横綱に上がったんだと思うけど、それからはずっと相撲が楽だと思ったことはないですね。

輪島さんとは、忘れられない相撲が何番もあります。

昭和49年の名古屋場所千秋楽。この一番で勝ったら、私の2場所連続の優勝と横綱昇進が決まるという一番、本割と決定戦の2番とも輪島さんに負けてしまったんです。

あの時は、屈辱でしたねえ。

今思い出しても、あの時のことはムカつきます。輪島さんは、土俵でスーッと下がるんですよ。私が入るまで足を掛けに、そう外掛けに行ったら、逆に下手投げを返されてしまった。2番とも同じような形で負

けてしまったというのも、悔しかったですし…。でも、その時の悔しさがあったからですよ。「こっちだって、やってやる！」という気持ちを、その後も持ち続けられたのは。

輪島さんも、「ここで、あいつには負けられない」という強い気持ちだったわけだね。やっぱり、横綱になった人っていうのは、意地がありますよ。意地がなかったら、勝負に集中していけませんから。

名古屋場所が終わって、横綱昇進が決まって使者を迎えた時、私はこう口上を申し上げました。

「栄誉ある地位を汚さぬよう、努力いたします」

最近だと、四字熟語とか、いろんな工夫した言葉を使ったりしますが、まあごく普通ですよ。でも、私はやっぱり横綱という地位は栄えあるものだと思っていますし、それを汚すという場合は、自分は辞めなければならない。そういう気持ちでしたから。地位を保っていかなかったら、引退になるわけですしね。

21歳になったばかりでした。名古屋宿舎で使者を迎えて、名古屋から東京に帰って来る時に、「果たして、私に横綱が務まるのかな？」と思いましたよ。ちょっとこう、武者震いするような感じでね。責任感が発生してきたんですね。

務まるのか、否か。

こればかりは、考えてもどうにもなることじゃないですからね。だから、次の場所が近くなってくるにつれて、何ともイヤ～な気分でしたよ。最初の頃は。翌年、横綱で初めて優勝して、それからも優勝できるようになると、少しずつ気持ちが落ち着いてきましたけどね。

「輪湖時代」と呼ばれてね。横綱を決める場所で、輪島さんに2番連続負けてしまった話があったけれど、あの場所を含めて、私は彼に本割で5連敗しているんですよ。私が横綱になった頃、輪島さんは

26歳とか、それくらいです。その頃は輪島さんのほうが優勝回数も多いですから、気持ちの面でもだいぶ違っていたと思うんです。

私のほうは、「なんとかしなきゃ」「優勝しなきゃ」という気負いみたいなものが強い。でも、輪島さんにはそれまでの経験や自信に加えて、自分の型があるというのが強かったと思うんですよ。

かと言って、負け続けるわけに行かないですからね、私も。しばらくしてから、輪島戦の時は、あえて長い相撲を取るという作戦に出ました。自分の不利な体勢になったとしても、無理して攻めずに、輪島さんを疲れさせるという作戦です。輪島さんは左半身で相撲を取りますから、動きが止まったら私は全身の力を抜いて、体重を全部輪島さんにかぶせるわけです。それで時間が経って相撲が長くなってくると、下で力を受けている輪島さんが疲れてきますからね、ヒザやら何やらね。

ただ、頭の中で考えて、うまくいくもんじゃないんです、相撲って。タフさっていうかな？やっぱり普段から稽古をして、そういう状況でも耐えられる体を作ることしかないんですよ。まあ、とにかく輪島さんには、そういう相撲を心がけたものですよ。

昭和53年は、初場所から5連覇しています。54年が優勝3回、55年も3回。私の絶好調だった時期となると、その頃になるのかなあ。25歳。男として一番いい、力が出る時ですからね。

それでも、横綱に昇進した昭和49年から55年までの7年間は、一度たりとも年間70勝を割っていないんですよ。70勝を切らなかったという点は、自分でも誇りを持っています。やっぱり横綱ですからね。ある程度、数字というものの目標設定も大事なんじゃないかと思っていました。

先にも言ったように、最初の頃、輪島さんには分が悪かったんです。彼のほうが5歳年上でしたから、晩年は疲れさせる相撲で、私もだいぶ勝てるようになってきました。でも、だからと言って、輪島さんが絶対のライバルかと言うと、また違うんですね。

私が思うに、ライバルっていうのは、一人だけじゃダメなんですよ。その場所その場所、対戦相手がどういう力士かということは、番付を見た時にだいたい想像が付くものです。その人たち、つまり対戦相手がみんなライバルだと思っていかなきゃいけない。どっちにしても、最終的には優勝という形にならねばいかなくはいけないんだから、横綱は。

ですから、私が一番重きを置いたのは、初日からの5日間です。まず、前半の5日間で星を落とさないことが大事なんです。そこを乗り切ってくると、気持ちが楽になって、優勝というものに目標を持っていける。最初に負けちゃうと、精神的に苦しくなっていくものなんです。よく、「前半戦に集中する」と言われるのは、そこなんです。

横綱になった頃の白鵬は、よく前半戦で星を落としていました。それでも、そこから盛り返して、優勝に結びつけていましたよね。あれは、かなり精神的にきついのではないかと見ていました。逆に、7連覇した頃の朝青龍は、前半はめいっぱい飛ばして、中日あたりまでほとんど負けなかったでしょう。「強気」「負ける気がしない」と称された朝青龍も、前半戦に賭けていたんですよ。

昭和52年から53年にかけては、「北の湖は憎たらしいほど強い」なんていうふうに言われたこともありました。

あと、土俵態度がふてぶてしい、とかいろいろ言われましたね。

でも、そんなふうに言われることについて、私は何とも思っていませんでした。繰り返しになるかもしれないけれど、横綱ってというのは、優勝して当たり前という存在ですから。優勝圏内から、早くはズれることはできない。できないって言うよりも、そうなってしまうと精神的に追い詰められて、自分が苦しい立場になるわけです。だから、必死で戦う。その姿勢がきつとそういう形になってきたんでしょうね。横綱なんだから、逆に「がんばれ」なんて言われたら、イヤでしたからね。

昭和56年の九州場所、ヒザに関節痛があって、そこに水が溜まってしまって、9日目から休場したんです。13歳から丸15年相撲を取ってきて、それが初めての休場でした。その前は全然休場がないということに、私は誇りを持っているんですけど、次の場所（57年初場所）は、前半戦1勝2敗から優勝しているんです。

前半戦重視の私が、1勝2敗。しかも、前の場所は休場。これ以上ない最悪の状況の中での優勝だっただけに、今でも忘れられない優勝になっているんですが、これが23回目の優勝です。

それからですね。ヒザ、足首と立て続けに痛めて、休場の場所が増えていったのは、23回目の優勝の後、次の優勝まで2年半かかっているんですよ。あの頃が一番つらい時だったかもしれないですね。ちょうど、千代の富士だとか、型を持っている力士が上位に上がってきましたしね。私も20代後半に差しかかってきていました。

やっぱり横綱ですから、優勝回数を意識しないとウソになります。1年に最低でも2回から3回は優勝しなければ、という気持ちはいつでも持っていました。ましてや、横綱は一人じゃないわけだから、3回優勝することだって、けっこう大変なものです。

だから、21歳で横綱に上がった時に、「横綱という地位を10年間保つというのは大変なことだな」と思いましたよ。でも、私の場合、若くして上がっているから、5～6年で辞めてしまったとしても、まだ26、27歳なんですよね。それじゃあ、ちょっと若過ぎますよね。どうしても30歳までは取りたい。何が何でも、という気持ちが強かったんです。地位を保つためには、みんなを納得させる優勝が必要。だから私は、優勝というものにこだわったんです。

23回目の優勝の後からのケガは、本当に堪えましたよ。年も取っているし、治りも遅い。その頃だけに通じることじゃないんですけど、やっぱりいつも心の中で思っていたことは、「精神的に負けちゃいけない」ということです。それと、痛みにもね。

ケガというのは、土俵上で相撲を取っている限り、常についてくるものだと思います。でも、そのケガの痛みに負けないことが大切なんです。痛みに負けてしまうこと、それは勝負からも逃げることですから。

人間って、精神的に追い込まれると、楽なほうに行きたがりますよね。「30歳まで取る」という目標を持った時、痛くても稽古だけはしなくちゃいけないという気持ちでいました。一つ逃げてしまえば、そこからほころびが出てきて、弱気になったりするものですからね。

私はこんな考え方の人間なので、座右の銘といえるような言葉は特にはないんです。心の中で思っていることは、口に出すものではない。口に出してしまうと、人間ってホッとするんですよ。だから、「グツとこらえてがんばる」というのが、私の心の中の目標なんです。

休場している間って、やっぱり気持ちが揺れますよ。平常心でなんかいられません。平常心を保つ、なんてことは簡単にできませんから、私の場合は必ずなにかにその思いをぶつけにいきました。自分の

体を必ず鍛えに行くんです。痛めているヒザは安静にしていれば治るんですけど、安静にさせてさえいればいいというものじゃない。治ったって、相撲を取れる状態にしなければならないので、わざとケガしたほうのヒザをいじめました。そうすると、自然に強くなっていきますからね。

自転車に乗って坂を上るとか、私らの体重は重いですから、一気に漕ぐとかなり足腰が鍛えられるんです。病院に行って治療して、夜は鍛えに行くということの繰り返しでした。

だから、59年夏場所で24回目の優勝を果たした時は、本当にうれしかったですね。結果的に最後の優勝になったわけですが、全勝できたこともうれしかった。

でもね、この頃から、なんか周りの人が私を見る目が変わってきたんですよ。

それまでは、「北の湖、負ける！」と言われていたのに、今度は「がんばれ！」だなんて。「ああ、もう俺もダメになってきたんだなあ」と感じましたよ。

そういうのって、自分の中でもよくわかるんです。これが最後の優勝になるかもしれないな...とかね。

「まだまだやれる」という気持ちがあっても、「長くないな」って、自分で悟ってしまったんですね。だからこそ、心に残る優勝でしたね。

私のもう一つの目標は、昭和60年1月に完成する両国国技館の土俵に上がるというものでした。

それは24回目の優勝の、あと半年後に迫っていました。けれど、秋場所、九州場所は休場。本来は、新しい国技館で優勝したいという気持ちはあったけれど、「もう優勝はできないな」と悟っている自分がいました。

初日は黒星。二日目の朝も、もちろん「出る以上は勝つ」という気持ちで、幕下の若い衆と十数番稽古をしました。それで臨んだ本場所で、多賀竜さんに黒星。

勝負がついた瞬間に、「引退だ」って決めましたからね。土俵を降りる時には、腹はびちっと決まっていた。引退とはそんなものですよ。

考えてみれば、つねに自分との戦いだったように思いますね。目標はつねに自分。人のまねをしても、できることとできないこととがありますから、誰か昔の大横綱を目標にしても仕方がないと、私は思っていましたよ。

そして、考えないこと。取り組みをビデオに録って研究している力士は、今も昔もいますけど、私に限ってはいっぺんもありません。「この人は強いな」という人は相撲を見ていればよくわかりますから、相手によって自分を変えるのではなくて、自分の相撲を崩さないことが大切なんだと思っていましたからね。考えないためには、寝ること。寝たら考えなくて済むから、寝るのが一番なんです。

まあ、現役時代というのは、つねに修行ですからね。横綱として成績を守ることは苦しいことですが、「苦しいからこそ突き進んでいこう」という気持ちで向かって行ってほしいと思います。

そして、東京場所前にある横綱審議委員会の稽古総見。ああいう場面で、横綱はカチッとした強さを見せることも、私は大事だと思います。横綱はつねに見られているという気持ちを忘れないことです。